

キーツのソネット『輝く星』をめぐって

菊池 巨

古くから星は人間の精神と深いかかわりを持ち、人間の精神を左右してきた。人間はこのかかわりから多くの文学作品を生み出してきた。

これから以下において、私が取り扱おうとする作品も、そのようなかかわりを持つキーツの二つのソネット『輝く星』である。ここにその原文を引く(John Barnard)。

Bright star! would I were steadfast as thou art—  
Not in lone splendour hung aloft the night  
And watching, with eternal lids apart,  
Like nature's patient, sleepless Eremite,  
The moving waters at their priestlike task

Of pure ablution round earth's human shores,  
Or gazing on the new soft-fallen mask  
Of snow upon the mountains and the moors—  
No—yet still steadfast, still unchangeable,  
Pillow'd upon my fair love's ripening breast,  
To feel for ever its soft fall and swell,  
Awake for ever in a sweet unrest,  
Still, still to hear her tender-taken breath,  
And so live ever—or else swoon to death.

この『ソネット』はタイトルを持っていないので、普通その冒頭の一行をめぐってタイトルに代えている。以下

さらに、これを簡略化して、『輝く星』として話を進めて行くことにする。このソネットについては、実は、私は以前に一度これを扱ったことがある<sup>(1)</sup>。従ってこれについての訳文およびその内容の概略は、ここにおいては省くことにする。

この作品において、私が目差そうとするのは、ただ一つの方向に絞られてくるのであるが、この簡単な一つの方向にこの論考を絞って行くのには、かなり長い前提を必要とする。今まで私は、ある作品の因って来たところを追跡するに当たって、いつでもその先端をイギリスの——というのは私の扱う作品はイギリスの作品に限られていたからであるが——範囲から出ないようにしてきた。その理由はここに繰り返す必要はない。しかしこの論考においては、今までの方法を少し変えなければならぬ。これは私の考えが変わったというのではない。かなり長い前提を必要とするということの成り行きから、そうせざるを得ないのである。

さらにもう一つ——この前提の最初の方の部分において、星のことを早速扱わなければならないが、このことについては、その方面の、すなわち天文学の知識をかな

り必要とするであろう。この専門的な知識を有することによって、この辺の事情はいよいよはっきりしてきて、論考にもある程度の生彩を加えることができるようになるであろう。しかし残念なことに、その方面に対する私の知識は皆無である。であるから、この辺のことについては、門外の常識的な感覚をもって処理して行くしか方法はない。始めにこんなことを断わっておかなければならない。

私はこの小論を「古くから」という言葉をもって書き始めた。そうするとこの「古くから」というのは、歴史の上から見てどの辺あたりになってくるのか。また「星は人間の精神と深いかわりを持ち」始めたのは、いかなる理由によるものなのであるか。そしてその「かわりを持ち」始めた、その発端はどの辺に見出し得るものなのであるか。このような問題が直ちに出てくるのであるが、今はこれが別にどうのという問題にはなっていない。専門家の間にはむずかしい意見があるであろう。しかし私には興味のある問題ではないし、また未知の領域に属することもあるので、この専門的なことには近寄るわけにはいかない。今のところ、この辺のことについ

ては、ごく大雑把なことが分れば十分である。

その方面の専門家の意見を利用してもらうと、こんなことになるようである。<sup>(2)</sup>

大体、星をかなり、はっきりと意識するようになるのは古代バビロニアにおいてであるようである。バビロニア人はそれぞれの星に神々が住んでいると考えていたらしい。このことは中国においても共通するようであり、ここにおいては星は神格化される。このような現象は、いずれも星を天の代表と考えたことによるとのことである。バビロンでは太陽の位置を示すのに黄道を十二等分して十二宮とし、この区分によって星を観測する。中国では日没時と夜あけ時などに黄道方面に、ひとときわ目立って輝く星を目印にして、西から東に向かって二十八の不等分な標準点——二十八宿を設ける。この二十八宿という考えの出てきたのは周の始めの頃だったらしい、とこんな説明になるようであり、中国の二十八宿とバビロンの十二宮との相互関係については、その方面の甚だむずかしい問題になってくる、とのことである。

このように利用させてもらっても、素人の私には余りピンとこない。ただここで私が興味を持ち、またこれか

らの論の進行においてかかわってくるのは、古代人が星の中に神々が住むか、あるいは星に神格を与えていたということ、そして中国において、朝夕の薄明時に、黄道方面に一段と輝く星を意識していたという、この二つの事柄である。

ここに出てくる「一段と輝く星」はいわゆる金星あるいは明星、英語でいうヴィーナス (Venus) と考えていようである。そして朝に出現する場合は「明けの明星」(Phosphor, Lucifer)、夕方に出現する場合は「宵の明星」(Hesperus, Vesper) ということになるのは断わるまでもないであろう。

ここでヴィーナスという呼び名が出て来たが、これについては多少触れておく必要がある。

これはいうまでもなくローマ神話に由来する。そしてこれはギリシア神話のアフロディテ(この呼び方は習慣に従う)に相当するというのが、少し調べてみると、それぞれこの二つの神は大部分の性格を異にする。詳しいことは避けるが、ヴィーナスの起源はイタリアのシシリー島あたりにあるらしいので、やはりこれはローマ神話に由来するとしておいた方が無難のようである。

ところでここによく分らない問題が出てくる。それは、金星あるいは明星をヴィーナスというが、それはどうして、そう呼ばれるかということ、いい換えればローマ神がなぜ星と結び付くようになったのかという経緯である。このことについて私は前から不審の念を抱いてきた。いろいろと『古典辞典』のたぐいのものに当たって見るのではあるが、今なおその疑念は晴れずにいる。普通の字引きにおいては、ローマ神と星との説明が同じヴィーナスのところであつてゐるから、語源においては、ローマ神と星は同じということになる。もちろんここでもその二つの結び付きについては何も得るわけにはいかない。この結び付きについて、いつ、どのようになつてかというようなことが判明するとこれからの論考に甚だ工合がよくなつてくるのであるが、今のところどうにも致し方がない。後考にまつより外に方法がない。従つて以下この区別については、このまま離して考へて行くことにする。すなわちヴィーナスは、ある時はローマ神に、そしてある時は星になつたりする。何にしても、まことにつまらないことが分らない。博雅のご教示が得られればありがたい。

ところで星のヴィーナス——と大体決まつたようにしておく——が、われわれの身近に現われてくるのを捜すと、古いところでは聖書が一番便利のようである。聖書は最近の收穫といわれる英訳 *The Living Bible* (1974) を使用し、ここにはこの論考とかかわりのある箇所のうち、その一部のみを抜く(註は筆者)。

How you are fallen from heaven, O Lucifer, son of the morning!

——Isaiah, 14. 12.

But when you consider the wonderful truth of the prophets' words, then the light will dawn in your souls and Christ the Morning Star will shine in your hearts.

——2 Peter, 1. 19.

And I will give you the morning star!

——Revelation, 2. 28.

I, Jesus, have sent my angel to you to tell the churches all these things. I am both David's Root and his descendant. I am the *bright Morning Star*.  
— *Ib.*, 22. 16.

因に下線部の箇所だけ読んでくれば、Authorized Version においても、一番目と三番目の例については、全くその英訳は同じである。

二番目の例においては、Authorized Version では(リイタ<sup>ク</sup>筆者)

.....until the day dawn, and the day star arise  
in your hearts:

となっており、はなはだ素っ気ない表現である。

最後の例においては、

.....I am the root and the offspring of David,  
and the *bright and morning star*.

となっており、二つの英訳とも、ほぼ類似する。

このように「明けの明星」は Lucifer, the (bright) morning star, (the day star) というように英訳されている。そしてここで興味のあることは、聖書においては、だいたいヴィーナスはシリウス(Sirius)を指していたらしいということ、そしてもう一つ、聖書には「宵の明星」は現われてこないということである。それは「明けの明星」は希望を象徴するということであつたらしいことに基づいているようである。「宵の明星」ではやはり希望と結び付くことはむずかしいであろう。夜明けに出る星、それはやはり希望へと容易につながるであろう。そしてヴィーナスとシリウスとの混同があるようであるが、これはもちろん天文学的な知識がまだ不正確であつたことによるのであろうと推測される。しかし「明けの明星」といえばやはり第一義的にはヴィーナスを指していたようである。<sup>(3)</sup>

このように聖書の例においても、科学的な正確さをもつて「明けの明星」すなわちヴィーナスと一致せしめていないところに、文学的な正確さ、すなわちリアリティがあるということになるであろう。

さらに、これをルター訳の聖書に当たってみると、一番目の例から順にこのようになってくる——*du schöner Morgenstern; der Morgenstern; Morgenstern; der helle Morgenstern.*

どの例においても *Morgenstern* が共通する。

そしてまた字引きによると、中国の古典においては「明けの明星」を啓明、「宵の明星」を長庚といい、共通して太白星というのだそうである。啓明は分かる気がするが、長庚はどのような意味を持つのであろうか。

追加的にここに引いたドイツと中国の例も、おそらく科学的な真実を含むものではないであろう。この二つの例についても、文学的な香気を持つといっても、おそらく誤りではなさそうである。

このようなことから次のようなことがいえそうである。だいたいヴィーナスといっても、それは極めて文学的な雰囲気につつまれ、それが使用される場合によって、その象徴的な意味合いは左右に揺れ動き、丁度その揺れ動きは星のまたたきに似る。

さらに、これにもう少し言葉を添えてみるとこのようなことにもなるであろう。ヴィーナスのラテン語の語源

*venus* の意味は *loveliness, attractiveness, beauty, grace, elegance, charm* と同じことであり (C. T. Lewis) 高津春繁氏もこれを採る。とすればヴィーナスはその語源において既に「文学的な雰囲気」を持つということになるかもしれない。また、これは伝説であるから利用していかどうか分らないが、釈迦は「明けの明星」を見て悟りを開いたということである。ここには先に引用した聖書と共通なものがあると共に、この星が深く人間とかわるということにもなってくる。そしてヴィーナスには衛星はないというが、このように、目に見えない、いくつかの衛星がその周囲を回って人間の想像力をかき立てるようである。このふくらんだ想像力から「象徴的な意味合い」が作り出されてくるであろう。

だいたいこのようにしてヴィーナス——もう一度繰り返すが、あるいはそれとおぼしき星——は、神話の時代を経て宗教の時代において既に、その性格を固めたと見ていいようである。あとはこの性格が、それにつづく時代を通してどのように受け継がれ、展開されて行くかを見ればよいことになる。

次の時代は中世ということになってくるが、この中世

においても、おそらくこの星をめぐっての意識、およびその意識を具体化せしめた文学作品は、数多くあるであろう。しかし、今のところ私の読書の範囲はそこまでは延びていないので、この時代についての私の覚え書きの分量は極めて貧弱である。この点については、今後の読書にゆずることを許して頂き、ダンテに飛んで行くことにする。

ダンテを選んだということには理由がないではない。周知の如くダンテは中世と近代との橋渡しの立場な立場に位置する。このことから考えてみて、ここに中世が近代へと移行して行く姿が見られるであらうというのが、われわれに便宜だからである。さらに副次的には次のような便宜もあるからである。それは、ダンテにおいて中世から近代への移行ということは、その宗教への意識がどのように展開するかということの意味するからであり、これは先の宗教の時代とかなり無理なくつながるであらうということと、もう一つは、この論考のテーマの主体となるキーツが、これも周知の事がらであるがケアリー(H. F. Cary)のダンテの英訳三冊本を持参して、例の北方旅行へ出掛けたという縁もあるからである。そして、

ここに断わらなければならないことは、ダンテにおける宗教への意識の展開ということであるが、このようなことを書くと、虚仮おどしに取られかねないが、これもここではただこの論考について最少限の内容が提供されればそれで満足しなければならないということである。

『神曲』において問題の星と関連のあるところで私の気が付いた箇所のうち二、三を挙げるが、キーツに因んでケアリー訳をもって示せば次の如くである(4) (イタリツ)。

The goodly shape approached us, snowy white

In vesture, and with visage casting streams

Of tremulous lustre like the matin star.

——Purgatory, XII, 81-3.

So I again restored to the lore

Of my wise teacher, he, whom Mary's charms

Embellished, as the sun the morning star;

——Paradise, XXXII, 94-6.

後のケアリー訳三行はかなり分かりにくい。参考まで

にめいと新しき訳を並べ (M. B. Anderson, 1932)  
(つは筆者)。

So turned I to the teaching of that one  
Who gathered beauty out of Mary's face  
as does the star of morning from the sun.

次に少し遡って同じ篇の VIII からの例。この VIII は今挙げた新しい方の訳によると *The Heaven of Venus* というサブ・タイトルを持つ。前と同様ケアリー訳は分りにくいのでそれに新しい方の訳とダンテの原文を添える(つは筆者)。

The appellation of that star, which views  
Now obvious, and now averse, the sun.

—Paradise, VIII, 13-14.

that planetary star which, now at brow  
and now behind the shoulder, woos the Sun.

.....della stella

che'l sol vagheggia or da coppa, or da ciglio.

ここに私が改めていうまでもなく問題の星は一番目の例においても分かるように常に宗教的な意味を帯びている。聖書からの風は、ここにも吹いている。しかしダンテの場合、その星は極めて審美的である。こんなところにも近代の逆風がダンテの頬を撫でたというと彼の位置を誤るであろうか。さらに専門家の指摘に寄り掛かると *Il Convivio* に出てくる *Troia* は愛の星を意味するのだそうである。このようなとらえ方は聖書には見られなかった。ここには近代の人的なものへの志向が漂っているといえるであろう。

キーツが北方旅行の際に携行したダンテの英訳三冊本を、どのように読んだのか、果たして全巻を通読し得たのかどうか、そしてまたこの英訳本から彼はどのような影響を受けたのか、その影響はどのような形でもって彼の作品へ反映して行ったのか——いろいろな問題が付随する。しかもこれは大切な問題であるが、今のところ、それはここに関係を持たない。とにかく星の文学といわ

れる『神曲』の世界に触れたということ、これを読むことによつて、彼がおそらく北方において仰いだであろう星は、今までとは異なつた光りを彼に投じたであろうということとは考えられないであろうかということ、そしてこれがまだ無形のままであつたかも知れないが、彼の意識のどこかに沈澱したであろうということなどが今ここに關係を持つ。

ダンテのことを「ダンテといわれる、フロレンスの賢明なる詩人」(the wyse poete of Florence, That highte Dant,……—*The Tale of the Wyf of Bath*, 1125-6)として尊敬していたチョーサーになつてくるとヴィーナスの扱い方はかなり複雑になる。いうまでもなく、キーツはこの詩人をかかなりよく読んでいた形跡を示している。その形跡のはっきり現われたのは一八一七年五月十六日出版主のテイラーとヘッシー (Taylor and Hessey)宛ての手紙においてである。キーツ二十一歳半。

このことについても、前のダンテの英訳本の場合と同じことがいえ、そしてここでも処理の仕方を同じくして差し支えないであろう。チョーサーをどの程度まで、どの範囲まで、そしてそこからの影響はどのようなもので

あつたか——これらをそのまま通過する。ただここではダンテの場合と同じく、一つのことを知れば十分である。それはいま触れたチョーサーのヴィーナスの扱い方が複雑になつたというが、どのように複雑になつたかということである。これを簡単に見てみると次のようになるであろう。

チョーサーはヴィーナスを神話的存在と星とその他の面において用いている。これを範囲を限りながら例示してみる。まず *The Knights Tale* におらう。

「愛の女神」(Goddess of love) となるもの——一九〇四、二四四〇、二四八〇の各行。これが海と關係づけられたもの——一九五五行。これをヴィーナスの基本的性格として、さらに、それをいろいろな面において示したものと、いちいちその行を挙げないが、十四、五例ばかりを見付けることができる。

これらのものと異なる関連としては、いわゆる性的な意味にかかわるものとしては有名な *The Tale of the Wyf of Bath* において見られる——六〇九行その他数例。

以上二つの方面の例はスキート (W. W. Skeat) がウ

イーナスについてその『語源辞典』に示す説明、the Goddess of Love—L. Venus, see *Venered* に該当する。この二つの方面の例はヴィーナスを神話的存在とそして極めて人間くさい二つの面、いい換えれば対極的な存在を示す。

さらにチョーサーはヴィーナスを星としてとらえる。

その例は同じく *The Tale of the Wyf of Bath* の七〇五行に見える。この辺には星と人間とのかかわり合い、すなわち運勢のことが触れられている。さらにヴィーナスが人間に仰ぎ見られる存在——星から「愛の女神」へと結び付く存在となってくる——*Troilus and Criseyde* の第三卷一—八行。ここにはヴィーナスへの敬慕があり、二行目の「この美しい第三天宮」(al the thridde hevene faire) は先に触れたダンテの *Il Convivio* と何か関係があるであろうか。専門家のご教示を待つ。同じく第五卷一〇—一六行にも星としての言及が見える。その他 *Treaise on the Asprlobe* にも当然のことながら言及が見えるようであるが (W. W. Skeat), 私は読んだことがないので省く。

このように、チョーサーになってくるとヴィーナスの

内容は多彩になってくるが、これは今までに見られなかった新しい展開を示すといえるであろう。この内容の多彩が、やはりキーツの意識のどこかに引っ掛かったであろうというのが私の想像である。ここで一つ気が付くことはヴィーナスは、聖書の場合と同じく、星としては「宵の明星」として現われてこないということである。

さらにいえば、チョーサーの場合、神話的存在として、星として、そしてその他のものとして現われるにせよ、そのいずれにおいてもイタリア・ルネッサンスの影響を示すように、ラテン的な明るさを持つことをその特色としているといえるであろう。そして神話的存在としては当然ながら、星としてもそれは常に人間の憧憬の対象となり得る。このようなことが、どのような変容を伴ってそうなるのかということはいえないが、いずれ何らかの形を取りながらキーツの意識に引っ掛かって行ったであろう。

ここまで来れば、ヴィーナスとキーツとの関連は、ぐっと近いものになり、それだけ分かりやすくなってくる。

その例としてシェイクスピア。キーツがシェイクスピアに親しみ、そしてシェイクスピアから深い影響を受け

たということ、今ここに改める必要はない。そしてシエイクスピア以外の、なんんかの詩人たちからも、それぞれに影響を受けるわけであるが、その詩人たちは途中から放棄される。シエイクスピアだけが、キーツの生涯にわたって、その魅力を減ずることがなかったということも、改める必要はない。

シエイクスピアの作品の中でここに最も関係のあるのは、キーツが通読したであろう『ヴィーナスとアドゥニス』(Venus and Adonis)である。ここに展開される世界は、いうまでもなく神話の世界である。しかし、その神話の世界は、いかに生々しく、そして人間臭いことであるか。それを通り越して肉感的であり、そして官能的ですらある。このことが目下の問題にとって大切なことである。人間的なヴィーナス——これはキーツの意識のかなり表層的なところに定着したであろう。さらに、この作品の中で次の箇所が注目されるであろう(イタリッ)。

Look how a bright star shooteth from the sky,  
So glides he in the night from Venus' eye;

——815-16.

ほら、輝く星が空から光り出す、  
そのようにアドゥニスはヴィーナスの目から夜の中へ滑って行く。

そして、これは次のような箇所とも合わせ考えてみるべきであろう(イタリッ)。

But I am constant as the northern star,  
Of whose true-fix'd and resting quality  
There is no fellow in the firmament.

——Julius Caesar, III. i. 60-62.

だが、わしは動かないぞ。  
ちようどあの北極星、確乎不動、敵として動かないことは、

まことに全天その比を見ないあの北極星のようにな。

(中野好  
夫氏訳)

神話的存在というよりも、むしろ人間的存在といって

もしいシェイクスピアのヴィーナスが出たので、星と人間とは、どのようにして関連を持つようになったのかということをここで見る必要があるであろう。

なぜ人間は何かの憧憬の対象として星をとらえ、それを仰ぎ見るのであるか。これは、やはりイギリス人の考えあたりがその発祥となるようである。もちろん、このことについては、もっと前のことがあることは、いうまでもないであろうが、今は不問に付する。

人間の魂が星に変化するという考えは、プラトンの『テマイオス』において、見られるということである。<sup>(5)</sup>

さらに『バイドロス』においては、恋愛とヴィーナスとの関連が見えている。すなわちここにおいては神聖な愛が、ヴィーナスの比喻をもって説かれて<sup>(6)</sup>いる。このような考えが、よく作品に具体化された例としてはシドニー(Philip Sidney)のソネット集『アストロフェルとステラ』(Astrophel and Stella)がある。ここにおける Stella は Anglo-Latin の名であり、Græco-Roman の Astræe に相当する。このステラはシドニーの恋人リッチ(Penelope Rich)を指し、このように恋愛の相手を星としてとらえる態度が既に確立していたものと考えられる。<sup>(7)</sup> 当

時また、ガリレオのような天文学者によっても、金星の光りは恋をする人たちに影響を与える、というように考えられていたということを私はどこかで読んで記憶している。このように、プラトンあたりによって認められた星と人間との関係は、十六世紀ごろには文学においても、すっかり根を下したことが分かる。記憶にたよることなので、あまり、はっきりしたことはいえないが、ガリレオのような科学者にもなかなか文学的どころがあったようである。

今われわれは、十六世紀に到着したが、ここからキーツに行くまでには、十七世紀を経由しなければならぬ。このつなぎ役として、私はドライデンを利用する。クラークの塾に入ってから六年目すなわち一八〇九年、キーツ十四歳の時、ウェルギリウスの『イーニッド』(Aeneid)——タイトルは英訳に従うことにする——の散文訳に着手した。これがともかく完成されたのは二年後の一八一一年十六歳の時であった、と伝記的には一応こうなるようである。<sup>(8)</sup> このあたりの伝記的事実については、どの文献に当たってみても、はっきりしない。完成したかどうか、これも確証があるわけではない。しかし

少年キーツがウエルギリウスの散文訳を行なったということは事実らしく、このことを私は重く見る。もちろんその散文訳が今日に残っているわけではない。この行なわれた散文訳のことであるが、これはラテン語の原典から為されたものではないであろう。十四歳の少年がよくこれを為し得るといふことは、いかな天才をもつてしても無理である。事実キーツはギリシア語ラテン語は出来なかった。ラテン語の知識といつても、僅かに単語を少し知っていたにすぎなかったようである。要するに古典語とは無縁の人であったといつていいであろう。そうすると散文訳の底本となったものは、誰かの、英語による韻文訳であつたであろうという推測が成り立つてくる。誰の韻文訳であるのか。もちろん分かつていない。分かつていなければ、このところは、こちらの想像で埋めるより方法がない。誰のものでもいいのであるが、仮にドライデン訳としておくのが便利である。ドライデンとするのは、彼がキーツの作品に深く影響するからである。このような設定で話を進めてみる。

このドライデン訳『イーニイッド』十二巻の各巻の始めのところは簡単な話の筋が付けられている。これを読

み本文に入つて行けば、それは少年詩人には都合がよかつたであろう。これならば散文訳は可能であつたであろう。とにかくこのようなことで少年詩人は『イーニイッド』の世界に触れたことであろうと想像される。ここでこの論考に関係のあることは、周知の如く全篇を通じて、トルヌス(Turnus)の味方のひとりとしてヴィーナスが登場することである。このヴィーナスも何らかの形として、少年の純粹な脳裏に止まつたであろう。その形はどのようなものであつたのか知るよしもないが、ドライデンの影響から考えてみて、印象は消しがたいものであつたであろう。

このようにして十八世紀に入ってくるが、この世紀に入ると「宵の明星」が詩の世界に多くなってくる。理由を述べる必要もあるが、今はこの変化だけを挙げておくことにする。ざつとの系譜を辿つてみた。ここで論考の前提は完了する。キーツがソネット『輝く星』を書いた時、その背景として、ヨーロッパの伝統が豊かに、ずつしりと横たわつていたことを知らなければならぬであろう。われわれはキーツの作品をヨーロッパの伝統へと広く開き、つなぐ必要がある。かくして、この『ソネット

ト』の意味は重要さを加える。

冒頭に掲げたソネット『輝く星』がその形を固定するまでには、いろいろな経緯がある。まず始めに、この『ソネット』はキーツの恋愛の相手ブローン (Frances Browne) と結び付くが、彼女と会ったのは一体いつであるか。一八一八年八月十八日 (あるいは漠然と八月)、同年九月の始めのあたり、十一月、十二月一日以後とするものもあり、また当のブローンは同年の九月あたりとされている。要するに、はっきりしたことは分からない<sup>(9)</sup>。だいたい一八一八年とするとブローンは十八歳ということになる。このソネットの最初の形のもが書かれたのは、おそらく一八一八年の十一月始めのころであり、翌一八一九年四月ごろには、改変された (revised) 形のもが彼女の手もとにあったといわれる。この「改変された」というのは正しくは、転記された (transcribed) とあるべきである。すなわち、この「転記された」のは、日時が違うが、一八一九年十月から十一月にかけてのいつか、キーツが彼女に与えたケアリー訳のダンテの一冊に彼女の手によってであるという<sup>(12)</sup>。三冊本のうちどれなのかは分からない。転記を一八一九年四月とするものに

はマリー (J. M. Murry) もいる<sup>(13)</sup>。あるいは先の (11) の説はこれによるのであろうか。彼女の転記がケアリー訳ダンテにおいて為されたことにより、この『ソネット』が彼女に結び付けられるのである。

この『ソネット』が一八二〇年十月一日<sup>(推定)</sup>、イタリヤへの転地療養を日差す船上において、シェイクスピアの詩集のうち『恋人の嘆き』(A Lover's Complaint) に面する白紙に再度書きしるされ、キーツの死後一八三八年九月二十七日、Plymouth and Devonport Weekly Journal に発表された。もちろんこれは最初の形のものとはかなり違っている。この二つの形の『ソネット』の異同について考えてみると面白いのであるが、今は、とにかくこのようにして冒頭に掲げたものに落ち着いたということの方が大事であるので、異同のことについては触れない。私が興味を持つのはこの『ソネット』の冒頭第一行 'Bright star! would I were steadfast as thou art' である。始めの星のことは次に触れることになるので暫く省く。'thou' はおそらくブローンへの連想であろう。この一行の解釈であるが、輝く星のように変わらないでいたいという、「私」——すなわちキーツであろうが——の願

を示す。それは誰に対して「変わらないでいたい」のか。この対象があるはずである。もちろんこの対象は恋人であることは間違いないであろう。こうなってくると対象の方も「私」と同じように「変わらないで」ほしいということになるであろう。「私」だけが「変わらないで」、相手の方は変わっていいというわけにはいかないということとは明らかなことである。となるとこの一行は恋人に対する強い希求ということになる。私は今のところ、このように読みたのである。ギテイングスあたりはこのソネットにシェイクスピアの『トロイアスとクレシダ』の反響を読もうとするようであるが、私には時間的にも過去の方へその反響を延ばせそうな気がする。そしてその方がより適切であるような気がする。その延びる線はチョーサーの世界へと結び付いて行く——*The Clerk's Tale* へと。この話は周知の如く、シンデレラのように玉の輿に乗った女性が、その貞操を試められるという話である。あたかも、旧約聖書のヨブのように幾つかの試練を受けるが、それを遂に耐えぬくという、むしろ近代的な個性が歌われている。この話を代表するように次のような言葉が出てくる——「操の変わらぬこと」。

その例を挙げる、*hire wyfly stedfastnesse* (1. 1050):  
……*dere wyf, thy stedfastnesse* (1. 1056)。キーツの『ソネット』と似たような言葉が出てきたからといって、私はこれに飛び付いたわけではない。この話自体がこの一語を軸にして展開するのである。『ソネット』の一行目もそのような軸的役割りを果たしていないであろうか。このようなところにこの『ソネット』がチョーサーの世界と響き合っていると私は考えてみようとするのである。次に暫く脇に置いた星のことに移る。十八世紀に入ってくると「宵の明星」——あるいは、それであろうと思われる星が詩の世界に多くなってくると前に述べた。その多くの中から一、二の例を挙げておく方が便利であろう。ブレイクの『宵の星へ』(*To the Evening Star*)、  
『夜』(*Night*) など。さらにキーツと同年代のうちから、これに関係する散文の例を一つ。ド・クゥインシー (*Recollections of the Lake Poets*) に次のような箇所がある——輝く星 (*a bright star*) が突然私の目に落ちてきた、そして、この周囲を変えたら、私をとらえることはなかったであろうと思われる哀感と無限感で、私の理解する力を貰いた。<sup>(15)</sup>

ここに見られる感情は、キーツの『ソネット』の引き金となった感情と極めて近いものを持っている。そしてここに利用されている星は天文学的にはどの星を指すのかとなると、明確に決定するわけにはいかないようである。ただ漠然と固定した星ということになってくるようである。であるから私は今まで金星、あるいはそれとおぼしき星などという、あいまいな表現を用いてきたのである。それではキーツにおける『輝く星』はどのようなことになるのであるか。このソネットの始めの数行あたりについて、その説明として普通、一八一八年六月二十五—二十七日に末弟トマスに宛てた手紙が利用される。この手紙には有名な文句が見える——偉大な力の不思議なものの上に、まぶたを開き、固定 (steadfast) することを決して止めることの出来ない北極星のようなもの (a sort of north star) を見抜く感覚の力を練る……。

ほんの少し、文脈を無視して、無理に必要な箇所だけを抜いた。もちろんこの箇所には多くの説明を要するが、今は 'steadfast' と 'a sort of north star' という二つの表現だけを注意すればいい。特に後者の表現は「北極星のようなもの」とあいまいになっていることが大切であ

る。これは北方旅行の際における、ウィンダムミア湖の描写の一部である。この文面を書いた時、詩人の脳裏に『神曲』のどこかが浮かんでこなかったであろうかというのにも触れた想像である。この印象はおそらく始めの方の『ソネット』の制作に影響を持ったであろう。その他これにいくつかの星の映像が、意識的に、あるいは無意識的に重なり合ったであろうことは、これも今までに触れてきた通りである。

このように見た場合キーツの「輝く星」はどうなるのであろうか。北極星なのか金星なのか。この二つの中いずれであるのかということに入る前に、朝と夕のどちらに属する星であるのかを決める必要がある。これは、「北極星のようなもの」という表現からして夕方に属すると考えていいであろう。となるとこれは聖書における場合とは違って、今までの例でいえば、シドニー以降の見方ということになってくる。すなわちこれは近代的なとらえ方である。次にこの星は北極星なのか金星なのかという問題である。これはいずれとも断定しがたく、二つの間を微妙に揺れ動いていたというのが詩人の情感であったであろうが、より多く金星に傾くであろう、とい

うのが今の私の考えているところである。ギャロッド (H. W. Garrod) は、彼の編んだ『キーツ詩集』に付けられた注の中でこのようなことをいっている。<sup>(16)</sup> 結論的な部分だけを抜く——「輝く星」は北極星である。……しかし「輝く星」はこの『ソネット』とどういう関係を持たなければならぬか。詩人は星にただ、固定と不変化を求めている。しかし、それらは詩人に実際重要なのであろうか。「輝く星」は『ソネット』が最終的にそれになる何かを實際に示しているであろうか。

星は北極星であるが、それはこの『ソネット』と余り関係はないということのようである。甚だ度胸のいい断定であり、そしてこの結論はこの作品の持つ意味を一気にぶちこわす。このような結論では困るのである。ここでこのギャロッドについて少しく脱線することにする。この『詩集』をもし彼が編んだとすると彼が七十八歳のときということになり、まだ編めば編めない年齢ではないであろうが、どうもこれは彼の弟子の誰かが編んだようである。<sup>(17)</sup> 従って彼のもう一つの、テキストを主とした『詩集』<sup>(18)</sup> とこの『詩集』とは、そのテキストにおいて、しばしば異同が見られる。そしてそれには何の説明もな

い。また前者は『キーツ詩集』の標準版と見られてきたが、これ自体しばしば誤植やあるいは読み方のおかしな所がある。標準版とはいいがたい。さらに信頼できる別の版の出現はこれから先のことになるであろう。後者の方の新しい『詩集』に付けられた注は、おそらくギャロッドによるものではなく、また弟子の誰かによるものであろう。それにしてもこの注は、余りにも粗雑であるといわなければならない。

「輝く星」を北極星と断定できないことを説明することは、そんなにむずかしいことではない。バイト (W. J. Bate) は「ファニー (・ブロン) は宵の明星ヴィーナスと結び付けられている。この『ソネット』の中でキーツは星の固定性と自分を同一化しようと望んでいる」と説明する。<sup>(19)</sup> その説明の拠るところは一八一九年七月二十五日キーツがブロンに宛てた文面の末尾に当たる箇所である——今晚私はあなたをヴィーナスと想像し、異教徒のようにあなたの星に祈り、祈り、祈るつもりです。Your's [sic] ever, fair Star, John Keats.

結びのところは見る通り恋人は「美しい星」として呼びかけられている。この箇所はアロット (Miriam Allott)

も引用している。<sup>(20)</sup>ここで「輝く星」はヴィーナスへと断定の方向に引っぱられている。そして詩人は「星の固定性と自分を同一化しようと望んでいる」というが、この意味については、私は前に述べたように解する。このことは、これでいいとして、ヴィーナスの方向に断定を引っぱることであるが、これには私はやや二の足を踏む。やはりこれも前に触れた通り、大きくヴィーナスに傾きながらも、まだ北極星の余韻が幾分ここからむものと見る。これをいい直せば、キーツにはヴィーナスと北極星との区別が明確に頭の中にあつたとは考えられないということがある。ここで私が重く見たいのは、彼が、大きくヴィーナスに傾いた「星」として恋人をとらえていることである。この態度を私は、前出のシドニーによる sonnet sequence 『アストロフェルとステラ』の世界の延長線上において考えてみたいのである。もちろんこの延長線を局地的にスペンサーにつないでみることもできるが、やはりシドニーの方になが方が、余裕をもって<sup>(21)</sup>できるであろう。このように、キーツのソネットは、シドニーのソネットの世界を継承しながら成り立っていると私は今のところ考えている。そしてもう一つ注意すべ

きことは、星の「固定性」が永遠という無限の深まりへと高まっては行かず、抽象化はされたであろうが、その対象となった地上的な女性の周囲を終始する種類であったということである。例えばゲーテの『ファウスト』に見られるような深まりである——第一部三四四—五行、第二部四九五—七八行を経て、同部最末尾に見える「永遠の女性」(Das Ewig-Weibliche)に至るような<sup>(22)</sup>。キーツのソネット『輝く星』を、イギリスの伝統に、そしてさらに、ヨーロッパの伝統の流れの上に乗せて見たならば、どういうことになるであろうかということが、かなり前から私がキーツについて考えていることの一つであつた。『ソネット』における一つの星が、このような伝統を背負っているのを見る時、キーツの世界が、イギリスを突き抜けて、長いヨーロッパの伝統へと深く結び付いているのが、はっきりしてくる。このようなことを目差した試みに従事するためには、この『ソネット』について書かれた今までの多くの注は、もちろんできるだけ目を通して見たが、それに引きずり込まれないように留意する必要がある。従って諸注の利用は最少限の範囲に、というのが私の警戒するところであつた。

(39) キーツのソネット『輝く星』をめぐって

一見したところ、ギャロッドの注ではないが、どうでもいように思われる一つの星についての考察に執着したのは、そこから豊かな伝統へとつながっている糸を手繰ることができると考えたからである。トリヴィアリズムと見える事がらも、暫くそこに足を止めてみると、それはそのまま通過してしまうことのできない内容を持っている。内容というのは伝統ということである。芸術においては、冒険はあるであろうが独創とすることはあり得ない。伝統が純粹な独創を許さないのである。この伝統を断ち切って、作品だけを独立させて考えてみて、そこから出てくるのは、作品には近付いてこない観念の回転だけであろう。このようなことを今までに私はキーツ他の作品にも適用して考えてみたが、この論考も、そのような私の態度の一つである。

- (1) 『一橋論叢』五十四卷二号。
- (2) 松本清張『清張通史』(331) (東京新聞)。(337)
- (3) 『聖書事典』(日本基督教団出版局、一九七六年)。(『あけの明星』6項)。
- (4) *The Divine Comedy being the Vision of Dante Alighieri* (Oxford Standard Authors, 1957).
- (5) Charlotte Spivack: *George Chapman* (Twayne's

English Authors Series, 1967), p. 40.

- (6) T. W. Baldwin: *On the Literary Genetics of Shakespeare's Poems and Sonnets* (Univ. of Illinois Pr., 1950), p. 375.

(7) Harry Levin: *The Myth of "The Golden Age"* (Indiana Univ. Pr., 1969), pp. 93—4.

(8) Robert Gittings: *John Keats* (Heinemann, 1968), pp. 28—35.

(9) 以下 John Dryden (trans.): *The Works of Virgil* (Oxford, 1961; Intro. by James Kinsley) を用いる。

なおこの英訳本については一切触れずに、*マナー* *ナチ The Aeneis* を使用せられた。

(10) H. E. Rollins (ed.): *The Letters of John Keats* (Harvard, 1958), I, 66.

(11)(12) Robert Gittings: *op. cit.*, p. 262.

(13) John Barnard (ed.): *John Keats: The Complete Poems* (Penguin English Poets, 1973), p. 684.

(14) J. M. Murry (ed.): *The Poems and Verses of John Keats* (Eyre and Spottiswoode, 1949), p. 342.

(15) Quoted in David Thorburn and Geoffrey Hartman (eds.): *Romanticism* (Cornell Univ. Pr., 1973), p. 184.

(16) *The Poetical Works of John Keats* (Oxford Standard Authors, 1956), pp. 467—9.

- (17) Cf. Jack Stillinger: *The Texts of Keats's Poems*,  
Harvard, 1974.
- (18) *The Poetical Works of John Keats*, 'Oxford English  
Texts', 1958.
- (19) *John Keats* (Harvard, 1963), p. 539.
- (20) *The Poems of John Keats* ('Annotated English Poets',  
1976), p. 737.
- (21) Cf. *Faerie Queene*, I. ii. 1; III. x. 44. *Astrophel*,  
55—7, etc.
- (22) 行数 卅 Erich Trunz 卍 419°

(一橋大學教授)